

自記式調査か、他記式調査か

高齢者「生きがい」調査からの研究ノート

山本 努

熊本大学大学院人文社会科学部 教授

生きがい研究に関与してきた社会学者は私の調査結果(山本,2017)にやや意外の感を持つかもしれない。「生きがい」を感じている者の割合が、従来の値よりやや少ないからである。これは、よく参照される従来の調査が、(面接員による)他記式調査であるが、私が用いた調査は(郵送法による)自記式調査であるためである(と思われる)。この拙著論文を執筆した時点では、他記式調査と自記式調査での結果の違いは下記のようなものである(表1)。

- ・生きがいを「十分感じている」が、他記式4割程度から自記式2割弱(16.6%)へ減少。
- ・生きがいを「感じている」が、他記式8割程度から自記式7割(69.2%)へ減少。
- ・生きがいを「感じていない」が、他記式2割弱程度から自記式3割弱(28.4%)へ増大。

この結果から、自記式調査においては総じて、生きがいを感じる者の割合が低くなっていることがわかる。

では、他記式と自記式、どちらの調査結果を採用すべきか。生きがい調査の場合、自記式調査のほうが正確な調査が可能と思われる。面接員の前では、「生きがい」なしとは答えにくいと思われるからである。その理由はいろいろありそうである。たとえば、被調査者(回答者)の「見栄」、被調査者が調査者の「期

待」に沿おうとする「過同調」などがそれである。いずれにしても、調査では面接員からの影響(圧力)から解放された状態で、正直に答えてもらう必要がある。その場合、自記式調査はすぐれた方法と思われる。

面接員による他記式調査は社会調査の「標準的な方法(鮑戸,1987:14)」であり、「もっとも正確な方法(安田,1969:9)」といわれてきた。しかし、自記式調査を見直す議論がある(海野,2008)。今回の調査結果はその見直しを支持する、意味ある事例である。すなわち、海野(2008:87)がいうのとは少し違う理由だが、「調査員による面接調査が信頼性の高い測定装置とはいえない状況」があるように思えるのである。

海野(2008:87)がいうのは「調査員の質を一定に保つのが困難」になってきたという理由である。勿論、これももっともな理由である。これに対して、本稿で主張するのは、「面接員からの影響(圧力)」による回答の歪みである。ほぼ同様の主張はハフ(1968:33-35)にもある。ハフが指摘するのは、「相手をよろこばせるような答えをしたいという欲求」である。「面接員からの影響」は古くから言われてきた問題なのである。

文献

- 鮑戸弘, 1987, 『社会調査ハンドブック』日本経済新聞社。
- Huff, D., 1954, *How to Lie with Statistics*, New York: W. W. Norton & Company. (ハフ.D., 高木秀玄訳, 1968, 『統計でウソをつく法——数式を使わない統計学入門』講談社〈Blue Backs〉。)
- 海野道郎, 2008, 「調査票の設計とその技法」新陸人・盛山和夫編『社会調査ゼミナール』有斐閣, 79-91。
- 山本努, 2017, 「限界集落高齢者の生きがい意識——中国山地の山村調査から」拙著『人口還流(Uターン)と過疎農山村の社会学(増補版)』学文社, 186-209。
- 安田三郎, 1969, 『社会調査ハンドブック(新版)』有斐閣。

表1 生きがい感(全国60歳以上:「あなたは、現在、どの程度生きがい(喜びや楽しみ)を感じていますか」)

調査法	調査年	十分感じている	多少感じている	あまり感じていない	まったく感じていない	わからぬ	合計
自記式	2014年	16.6%	52.6%	24.5%	3.9%	2.4%	3,687人
他記式	2013年	38.5%	40.7%	16.4%	3.9%	0.5%	1,999人
他記式	2012年	40.9%	40.8%	15.0%	2.7%	1.6%	1,631人
他記式	2008年	44.2%	38.3%	14.2%	2.7%	0.6%	3,293人
他記式	2003年	39.5%	42.2%	14.0%	2.9%	1.5%	2,860人

(出典)山本(2017:204)より。2014年全国調査:内閣府政策統括官共生社会政策担当「平成26年度高齢者の日常生活に関する調査結果」,調査対象は全国60歳以上の男女。郵送配布,郵送回収法による調査。2013年,2008年,2003年調査:内閣府政策統括官共生社会政策担当「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」,調査法は調査員による面接聴取法。2012年調査:内閣府政策統括官共生社会政策担当「高齢者の健康に関する意識調査」,調査法は調査員による面接聴取法。



Column
社会調査
の
あれこれ

フィールドワーカーとしての学生

藤井和佐

岡山大学大学院社会文化科学研究科 教授

修士課程1回生のときのことである。理論的にどうのこうのと、文献研究に基づいて頭で考えたことに拘泥する私を、指導教員は、「まずは行ってこい」とフィールドに送り出した。フィールドワーク系の調査実習経験もないままに、しかしそのことが頭をかすめるわけでもなく、農村と漁村にひとり出かけた。そしてそれぞれの調査から戻ってきたとき、教員から投げかけられた二つの言葉は、調査者の女性性について意識させるものであった。

一つめは、漁村調査から戻り、次のような内容の体験を話したときの言葉である。

漁業協同組合（以下、漁協）で聞きとり調査を終えたあと、路線バスがやってくる時間がかかなり先であったことから、私は通る車もまばらな道を駅に向かって歩いていた。そのとき、漁協で見かけた漁師さんの車がとまり、「駅まで乗せていってやる」と声をかけてくださった。数時間歩かなくていいことに加え、漁師さんにお話をうかがえるチャンスだとばかりに、ためらうことなくその車に乗った。そして調査後、「親切にしていたいただいた」と報告した私は、「なんて危ないことを…」と複数の教員から叱られたのだ。「そうか、私は危なかったんだ」と反省することになった。

二つめは、農村調査から帰ってきたときの言葉である。調査先で個人情報を含む貴重な資料をお借りできたことを報告したとき、「よく貸してもらえた」と驚かれると同時に、「女は得だなあ」とうらやましげに言われたのである。その後も同様の言葉をあちこちで聞いた。

正直に言えば、投げかけられた言葉のどちらにも違和感があった。当時はその違和感を解釈するだけの概念をもっていなかったが、今では、いずれの言葉も、調査における女性であることの損得を物語っているようでありながら、女性を脆弱な位置においたものではないかと思える。

そのように思いをめぐらしていると、私も似たこ

とを学生にしていると気づいたのである。

教員が、現地で帯同する形の調査実習において、学生たちは、学生だけで動けるときには動いている。また、合宿調査後には、学生だけで補足調査を行なう。調査実習に先立って、山間集落の祭りやイベントなどの見学を課すこともある。そのため、学生だけで動くことを想定し、現地入りの前には、挨拶の仕方や服装といったマナーから、熊や猪などへの対処法まで、さまざまな注意事項について、自分の失敗談なども含めて具体的に説明している。そして、(男女とも)「単独行動を避けるように」ということとともに、「車には乗せてもらわないように」と加えているのである。

さらに、調査から戻ってきた学生からの報告を聞いた私は、「よく聞けたね。学生は得だなあ」と、コメントしていることも思い出した。

近年は、選挙権をもっているオトナである学生にたいしても、過保護な、つまり自己判断能力を奪うような注意事項を説かねばならない時代である。それでも卒論研究時には、調査対象組織の代表者からのセクシュアル・ハラスメントによって、調査テーマを変更する必要が生じた学生や、素足になっての田植え(通常はやらない)の手伝いを促され、嫌と言えずにやって怪我をし、「農業だけはもう絶対にやらない」と宣言した学生もいる。丸山氏(2013)が、「調査倫理とともに、調査者の安全を守るための方途などもまた、議論されていくことを願う」と述べている。私もそのとおりだと思う。

脆弱な位置におくことへの反発と、脆弱だからこそ守る必要があるということとの狭間で教育せねばならない私は、今日もすっきりとしない気分のまま教壇に立っているのである。

文献

丸山里美, 2013, 「調査地でのセクシュアル・ハラスメント」『社会と調査』第10号: 124.